

〔書評〕

浪川健治監修、根本みなみ総括編者、山下須美礼・吉村雅美編者

『弘前藩主 津軽信明日記集成』

清水翔太郎

本史料集は、弘前藩八代藩主津軽信明が江戸と国許弘前で記した日記について、浪川健治氏の監修のもと、総括編者を根本みなみ氏、編者として山下須美礼氏・吉村雅美氏が加わり、翻刻、編纂したものである。史料編と資料編からなり、史料編には天明三年（一七八三）の「日記（津軽信明江戸在住日記）」（弘前市立弘前図書館所蔵「八木橋文庫」、以下「江戸在住日記」と略記）と、天明四年から寛政三年（一七九一）にかけての「在国日記」全一六卷（国文学研究資料館所蔵「津軽家文書」）の翻刻が収録されている。資料編には「日記」に記載されている津軽家関係者や大名等が表にまとめられるとともに、「弘前藩領組分図」が収録されており、「信明日記」を理解しやすいものとしている。

「信明日記」については、以前から関心を持たれてきたところで、『新編弘前市史』資料編三（近世編二）（弘前市、二〇〇〇年）においては、「在国日記」の内、天明四年二月と寛政二年二月の二ヶ月分のみではあるが、翻刻が掲載されている。前者については、通史編三（近世二）（弘前市、二〇〇三年）において、信明を事例に藩主の日常生活を紹介するために、現代語訳が掲載されている。

また「信明日記」を用いた成果として、浪川健治編『明君の時代』（清

文堂出版、二〇一九年）が刊行されている。本書には浪川健治「信明の模索―襲封、そして権力と権威―」、拙稿「天明四年における津軽信明の政務―「直捌」の実態に注目して―」、根本みなみ「弘前藩主津軽信明と「家」構成員―「在国日記」から「津軽孝公行実」「無超記」へ―」、山下須美礼「国許における藩主の気晴らしと家臣との交流―弘前藩主津軽信明の「在国日記」の分析から―」、萱場真仁「弘前藩の寛政民政改革と津軽信明」が収録されている。これらの題目からも、表向の政治のみならず、奥向の女性や、気晴らしといった「私」の側面まで、「信明日記」が多角的な視点から分析可能であることをわかりただけのものではないだろうか。その他、浪川健治「天気不勝」と自然の回復―天明飢饉後の豊穰祈念と除災の発源―」（『弘前大学國史研究』第一四六号、二〇一九年）、同「自然と政治のimbalance―「天気不勝」と「死罪除日」―」（『歴史』第一三二輯、二〇一九年）も「信明日記」を分析した成果としてある。

本史料集が刊行されたことにより、「信明日記」の全体に目を通し、利用しやすい環境が整えられたことは、喜ばしい限りである。まずは、浪川健治氏による解題「津軽信明をめぐるふたつの日記」をもとに、津軽信明および本史料集に収録されている「信明日記」の概要を示しておきたい。

津軽信明は、宝暦一二年（一七六二）に弘前で出生し、安永五年（一七七六）に信明（のぶはる・のぶあきら）と名乗り、父で七代藩主信寧の世嗣となった。天明の飢饉のさなか、天明四年（一七八四）閏一月、信寧が急死したため、翌二月、信明は遺領襲封した。寛政三年（一七九

一)七月に江戸で急死するまで、治世は七年と短い。しかしながら、「信明日記」からは、信明が家老以下の諸役人から差出された膨大な文書に目を通し、天明の飢饉後の藩政建て直しに邁進した様子が窺える。また、江戸における記述を欠いているにも関わらず、本史料集は史料編のみで六一八頁に及ぶ。このことから、信明が弘前における日々の政務や生活の様子を丹念に記したことがわかるだろう。

史料編に収録されている日記の概要は次の通りである。「江戸在住日記」は、天明三年一〇月一日から二月二二日にかけて、信明が世嗣であつた時期に上屋敷で記したものである。後述するが、江戸における信明の自筆政務記録は存在するものの、日記について現在確認できるのは、これ一冊のみである。

「在国日記」は、天明四年八月二〇日に信明が初入部で弘前城に着城した様子から記されている。この際、信明は天明五年三月一日まで在国し、毎日の天気、起床から就寝までの動きを詳細に記している。二度目の入部時は、天明六年九月二八日に着城したが、一〇月晦日までの日記は残されておらず、十一月一日から翌七年四月七日に弘前城を発駕するまでの記述となる。欠本部分については、後述する。三度目の入部時は天明八年五月二六日から寛政元年三月一二日まで、着城から発駕するまでの記述がある。四度目が最後の入部となったが、寛政二年五月二〇日から寛政三年五月一日まで、やはり着城から発駕まで、欠かすことなく日々の様子が記されている。

欠本部分と本日記の作成過程について、本史料集では言及されていないが、「信明日記」を分析する上で重要であると考えられるので、述べ

ておきたい。「在国日記」の他にも、信明自筆の政務記録として「天明四辰年家督令同八年在所江出已前迄之用向書留」と表題の付された史料が国文学研究資料館「津軽家文書」に含まれている(請求番号22B/340)。本史料名は正しくは「天明四辰年家督令同八月在所江出立前迄之用向書留」(以下「用向書留」と略記)であり、天明四年二月の家督相続から八月に初入部で江戸屋敷を立つまでの間、信明が作成した政務記録である(前掲拙稿「天明四年における津軽信明の政務」)。藩主在任期間における江戸屋敷での政務記録について、所在を確認できるのはこれのみである。つまり、信明が初入部を経て江戸に戻ってから、病没するまでの江戸滞在期間の記録は、現状では確認できないことになる。

「用向書留」は、横半切紙が十束、上包でまとめられており、その内九束は時系列順にまとめられていない。しかしそれらを並び替えると、天明四年二月一日から六月二一日分までは、一日あるいは二日分の出来事が横半切紙に詳細に記されていることがわかる。それ以後、江戸発駕が迫った七月になると、箇条書で面会した役人名、確認した書類などが記されているのみで、記述も簡略なものとなっていく。天気や日常生活の記述はなく、「在国日記」とは性格が異なり、政務に特化した記録といえる。

「用向書留」の残る一束には、「閏十月朔令晦日至日記下書」と記された横半切紙が付されている。これは天明六年閏十月に国許で作成された日記の下書で、「在国日記」四巻に収載されるべきものが、何らかの理由で清書されることなく、残されたものと考えられる。これらの下書と「在国日記」を分析すれば、天明六年九月末以外の信明在国時の様子が

わかることになる。また注目したいのは、信明が日記の下書を作成していた点である。

「在国日記」は下書を清書したものであり、凡例にもあるように、本史料集では信明による訂正部分はそのまま本文とされているが、信明は下書をもとに清書し、さらに訂正を加えるなど、慎重に日記を作成していたことが読み取れる。このような日記の作成過程を含めて気になるのは、なぜ信明は詳細な日記を作成したのかということである。この点については、本史料集の他、これまでの研究では十分に論じられておらず、今後検討すべき課題としてあるだろう。自らの政務について、先例を参照する意図もあったのであろうが、信明が特に後代の藩主が閲覧することを想定していたことは明らかである。信明は自らの没後、その治世の評価を気につけ、後代まで規範となるべき藩主像を示そうとしていたようにも捉えられる。

また、「信明日記」の特徴として、国許の記録に偏重しており、江戸の日記は系統的に残されていない点も重要であろう。これは意図的なものなのか、江戸の日記を作成していたものの、廃棄され、現存していないのか。この点も気になるところであるが、「用向書留」の記述が簡略化していったことをふまえれば、信明の関心は江戸の大名社会よりはむしろ、天明の飢饉後の藩政建て直しにあったようにも推察される。

これまでの藩政史研究においては、藩組織の文書管理などについて、アーカイブズの視角から分析されることはあっても、藩主の日記はあまり注目されてこなかった。ただし、津軽家においても信明に限らず、九代藩主寧親も「信明日記」のように詳細ではなく、かつ点数も多くはな

いものの、文化一〇年代（一八一〇年代）には国許・江戸双方での「日記」（国文学研究資料館所蔵「津軽家文書」）を残している。近世前期の藩主直仕置の時代については、書状など藩主が作成した文書の分析を通して、その政治的役割が検討されてきた。一方で中後期の日記は、「信明日記」のように伝来しているものの、それらを用いた藩主の政治的役割に関する研究蓄積は少ない。こうした点をふまえても、本史料集の刊行は研究上重要なものであり、これを契機として、当該期の藩主の日記や自筆記録への関心が高まることが望まれる。

以上、雑駁なものとなったが、評者の誤解、誤読があればご海容願いたい。「信明日記」について、浪川氏は「藩主という職とは何かを知ることのできる、極めて史料性の高い日記である。これを弘前藩の藩庁日記（国日記・江戸日記）とあわせれば、対幕関係も含めた総体的な十八世紀後半の近世社会像が浮かび上がり、たんなる地域史料という枠組みにはおさまらない歴史的価値を有している」（解題Ⅴ頁）と指摘する。

本史料集が広く共有されることで、今後、藩研究や武家社会研究のみならず、様々な視点から議論が深められることを期待して擲筆したい。

（A5判、六二八頁、東洋書院、二〇二二年一月二八日発行、本体価格七〇〇円＋税）

（しみず・しょうたろう 秋田大学教育文化学部講師）